

中部支部巡検会の報告：掛川層群上部層の観察及び化石採集

著者	青木 克顕
雑誌名	静岡地学
巻	83
ページ	31-32
発行年	2001-06-23
出版者	静岡県地学会
URL	http://doi.org/10.14945/00025116

中部支部巡検会の報告

～掛川層群上部層の観察及び化石採集～

青木克顕

平成 12 年 11 月 19 日(日)、やや肌寒い日であったが晴天に恵まれ、まずまずの巡検日和。掛川駅前に 20 名の会員が集まる。「さあ、今日はクジラの化石を見つけるぞ。」と、意欲満々の面々である。案内者は、東海大学自然史博物館の柴 正博会員にお願いした。

1 注目される掛川層群

掛川層群は、日本の太平洋岸の鮮新世から更新世初期(約 450 から 160 万年前)の代表的な地層で、豊富な化石が含まれている。特に、掛川市街の北西側に分布している砂層(大日累層)からは、貝化石がたくさん見つかった。最近、掛川地区は開発が急速に進み、いたるところに露頭が見られるようになった。地学関係者にとっては、まことにあり難いことである。1999 年 10 月には、柴先生たちの東海大学チームがクジラ類の化石を発見し、新聞などでも報じられて注目を集めた。

2 観察地 1 (杉谷:掛川市立総合病院北東)

本地点は、掛川市立総合病院前を北に折れたところにあり、広い造成地である。

柴会員によれば、掛川層群は下位より勝間累層、萩間累層、東横地累層、上内田累層、大日累層、土方累層の 6 層に区分されるという。本地点では、土方累層と大日累層が見られ、両者は整合的に接している。

初めに、大日累層を観察した。大日累層は全体として海進期に堆積されたと考えられ、陸側に新しい層が堆積している。層中には、ハンモック状斜交層理や平行葉理、トラフ型斜交層理などが発達している。ここでは、厚さ数十センチの灰色の砂泥互層が見られた。砂層には多くの火山灰層を挟んでいる。

その後、付近の露頭を一巡した。3 番目の露頭では、土方累層が見られた。土方累層は、海



退期に堆積されたため、海側に新しく層が重なっている。ここでは、灰白色のシルト層と黄土色の泥層との互層が見られ、貝化石が含まれていた。また、多くの火山灰層を挟んでいる。次の露頭では、土方累層内の断層を観察することができた。ちょうど角地にあったため、断層面を両側から観察することができた。

一巡したところで、柴会員から掛川層群上位層の層序についての説明があった。掛川層群の層序を解明するためには、火山灰の鍵層が重要な役割を果たす。柴会員らは、多くの新しい火山灰層を発見し、141層の火山灰層を確認し、離れた地域に分布する掛川層群について、各地層の層序がより明らかになったそうである。

3 観察地2（上屋敷西郷：掛川バイパス西郷IC南西）

化石採集現場に到着する。本観察地は、掛川市の区画整理地で、化石が含まれている貝化石層の上部をユンボで掘削してあるため、化石の露天掘り場といった感がある。まず、クジラの化石が見つかった経緯や古環境についての説明を聞いた。ここは、大日累層の一部で、約200万年前にこの地域に海が広がっていた頃に堆積した地層であるとのこと。産出する化石から、水深は100～200mで海底は大陸棚外縁からそれよりも深い斜面であったようだ。クジラの化石のほかに、サメの歯が40個見つかり、掛川層群で見られる代表的な貝化石はほとんどが含まれている。めずらしいところでは、タコブネという貝が産出したそうである。これは、日本海側にはあるが、太平洋岸で見つかることは珍しく、当時が今より暖かかったことの証拠にもなる。

さて、一行は当地で約2時間化石を掘り続けた。小学生や、静岡大学へ留学しているタイ人、エチオピア人なども含め、全員で掘りに掘った。パンダフミガイ、ベンケイガイ、ベニグリ等々、かなり多くのみやげを手にする事ができた。ところで、お目当てのクジラの方は、東海大学の学生が2個の「海生哺乳類の骨と思われる化石」を見つけた。骨の中がスポンジ状になっているので、それとわかるとのことであった。

掛川地区では、いたるところに露頭が見られるが、「現われては消え、現われては消える。」といった状況であるという。したがって、今回訪ねた露頭も、この原稿が印刷配布されるころには、消滅しているかも知れない。

今回の巡検は、化石採集ができるということで、子供たちや会員以外の参加者があったが、地学の楽しさを広く知っていただくために、一般の人にとっても魅力的な催しにしていきたいものである。



化石掘りに熱中する子供たち

（本原稿の作成に当り、当日の資料「掛川層群上部層の層序」（柴正博）より一部引用しました。）